

## 【連載：「私とオーディオの出会い」 Vol.5】

一般社団法人日本オーディオ協会

会長 小川 理子

オーディオは、音の入口から出口までの全てのプロセスに精通していなければ、極めるところまではたどり着けない。この第五回からは、私が演奏者として感じるところを徒然なるままに書きたいと思う。

ピアノは楽器の王者と言われるほどに、その表現力の豊かさには大きな魅力を感じる。

私が会社に入って7年目、20才代の若いエネルギーを費やして一心不乱に打ち込んだ仕事が開く前に組織が解散し、失意の中でジャズの演奏活動を始めた頃、ジャズのルーツまで遡ってゼロから独学で学ぼうと決意した。それまでは、大学時代の同好会で、見よう見まねでビル・エバンスを弾いたり、オスカー・ピーターソンを弾いてみたり、と、カッコいいなあと思えるピアニストの演奏をコピーして、単なる楽しみで弾いていた。そんな私が、ジャズのルーツを学ぶきっかけは、今も一緒に年一回は演奏している当時の上司の木村陽一さん。木村さんは、早稲田大学ニューオリンズ研究会の第1期生、つまり同好会の創設者。木村さんが言うには、ビル・エバンスやオスカー・ピーターソンもいいけど、小川さんのようにクラシックピアノをみっちり学んできた人には、ジャズのルーツから勉強した方が、理解、表現、オリジナリティ、全てにおいて、深みが増し、面白くなるはず、というものだった。クラシックピアノならば、バッハ、モーツァルト、ベートーベン、というように、歴史的に古いところもしっかりと音楽基礎教育の段階で皆が一様に学んでいくが、ジャズの場合はあまり体系化されていないように思う。

初期のジャズは1890年代のラグタイムに始まるが、まるでクラシックピアノ曲のように優雅。舞曲、メヌエットのようだと感じた。ジャズの起源は、アフリカのリズムとヨーロッパのメロディが融合した、とされているが、ラグタイムは、シンコペーションのリズムにその兆しがあるものの、欧州のクラシック音楽の香りが色濃く残り、フォスターに代表されるアメリカ民謡にも影響されていて、大変面白いと感じた。

このラグタイムを学んだ次に、ストライドスタイルに出会った。正確には、ニューヨークハーレムストライドスタイルである。ラグタイムから派生し、ブルースや黒人霊歌なども取り入れられたスタイルで、その名のごとく、1910年代から1920年代にニューヨークのハーレムに住んでいた黒人たちが発明したピアノソロのスタイル。ストライドとは、よく陸上選手の歩幅のことをいうが、この場合は、左手が鍵盤の低音部と中音部を大きくまたぎながら、ベースとドラムの表現をするので、そのように名付けられたという。右手はトランペットやクラリネットなどジャズバンドのメロディを受け持つ楽器の役割もする。つまり、10本の指で、オーケストレーションのごとく表現することができる。しかも、スピーディな曲になるとドライブ感は言葉に出来ないほどの高揚感に達する。身体中の細胞が踊り出すような、そんな体感があり、だからやめられない、とまらない！笑



shutterstock.com • 1238113795

こんな奏法だから、真剣にソロを弾くと、ごまかしもできず、逃げ隠れできず、相当の体力気力が必要である。だから、プロの演奏家でもあまり弾きたがらない。



私は何故か面白くて、まるで考古学者が遺跡を発掘するように、ほとんど聞いたこともないようなストライドの名曲を独学でマスターした。

2003年にオールソロでリリースした *Jazz-A-Mine* というアルバムに、貴重なストライド曲を収録している。アルバムタイトルは、ストライドスタイルの元祖、クラシックで言ったらバッハみたいな存在になるが、ジェームス・P・ジョンソンというピアニストが作曲した美しく華やかな名曲のタイトルである。またこのアルバムには、ストライドスタイルに影響を受けた後の数々のピアニスト、デューク・エリントン、

カウント・ベイシー、ファッツ・ワーラー、ジョージ・ガーシュウィン、セロニアス・モンクなどなど、私の大好きなピアニストの名曲を収録した。十数曲を一日のうちに収録したのだが、終了したときには流石にぐったりと疲れきったのを覚えている。

その後、ビクターエンタテインメント様からリリースしていただいたアルバム、*Swingin' Stride* の中にも、何曲かソロのストライド曲を収録していただいた。アルバムの冒頭は、ファッツ・ワーラーの *Finger Buster*。

文字通り、指が壊れてしまうほどの超絶技巧を要する曲だが、巨漢のファッツが軽々と弾く昔の音源を聞いて、これは凄い、と驚きつつ、自分も挑戦したシロモノ。同じ曲名で、ピアノジャズの創始者は自分だと名乗るジェリー・ロール・モートンも作品を残している。このジェリー・ロールは、以前公開された「海の上のピアニスト」の一場面にてくる。



船上で二人のピアニストが夜通しピアノ演奏で格闘するシーンである。



shutterstock.com • 641574217

一人が映画の主人公、もう一人がジェリー・ロール。スカットとする、目の覚めるようなストライド演奏である。面白かったのは、あまりのテンポの速さとドライブ感で、グランドピアノの弦が高熱になり、演奏直後にくわえていたタバコを弦に触れさせたら火がついた、という話。それぐらいドライブするスタイルである。

カウント・ベイシーのビッグバンドでドラムや管楽器が炸裂する、あんなイメージである。

奥が深く幅の広いジャズが生まれた、20世紀初期のすさまじいパワー、エネルギーの一端を感じる。

次回に続く。。。。